

感謝

下田市立稲生沢中学校3年 榎本 琉晟

僕が税の作文について「この宿題って、僕に関係ある？」と母に質問したところ、母が買い物をした時、あなたは消費税を払っているから、少しだけ、誰かの支えになっているんだよって教えてくれました。母は、税について、せっかく学ぶ機会があるのなら、知っておいてほしいこと忘れないでほしいことがあると、僕に黄色紙を差し出しました。

その紙は、僕が静岡の病院に行った時、受付に出す小児慢性特定疾病の受給者証でした。僕は、五才の頃から頻回再発型ネフローゼ症候群という病気になり、十五才の今でも、その病気と戦っています。

母は、初めは、病気の知識もなく、ベッドで点滴や色々な機械に繋がられている僕を見て泣くことしか出来なかった。そして高額な治療費に心が折れそうになったと話してくれました。そんな時に、医療費助成制度をしり、小児慢性特定疾病に僕の病気も含まれていて受給を受けることが出来るようになりました。このことで医療費の負担も軽減され、母は、病気とも向き合え、不安しかない日常から、抜け出す一步になったと声を震わせ話してくれました。

母が僕に教えてくれたこと、名前も顔も面識もない人達の納税のおかげで、十分な治療が受けれていること、高い薬を投与できてること、多くの薬を服用できてること、僕の当たり前の日常は、色々な人の支えがあって、けっして当たり前と思っではいけないこと。

中学生になって、だいぶ病気も落ち着いて、入院することも減り、大好きな部活も、友達とも楽しく中学校生活を送れている。病棟という別世界の中でベットから窓をのぞいて、行きかう車をながめて、早く抜け出したいと願っていた。

その願いを叶えてくれた日本中の人に、僕は生かせてもらっていると感謝しています。僕が社会人になり、税金を納めるようになった時、今の気持ちも忘れずに、誰かを笑顔にできるように誰かの一步になれるように、一人一人がしっかり納税して支え合って日本の暮らしをより豊かに笑顔な国にしていかなければいけないし、僕は誰よりも納税の大切さを知ることができて、よかったです。